

丹沢ドンの活動

●**変遷・会員等** 1992年3月、丹沢ドン会設立。DON（ドン）は、Do for Nature の意。2001年9月11日、神奈川県より NPO 法人自然塾丹沢ドン会の認証を受ける。ファミリー会員制度。120 家族＋毎年の自然塾生 20～30 人。

●**組織の概要・活動内容等** ドン会会員は地元住民と都市住民により構成。都市と農村を結びながら、棚田の復元、里山の管理活動を通して食の安全や生物多様性の実現を目指し、伝統的な農村風景である里地・里山を保全・再生し、次の世代に引き継ぐための事業や仕組みづくりを行っている。

●**これまでの受賞歴** 第 16 回神奈川県地域社会事業賞（2003 年、神奈川新聞社）、第 18 回「手作り郷土賞」（地域活動部門 03 年、国交省）、日本の里地里山 30 保全活動コンテスト選定（04 年、環境省・読売新聞社）、第 2 回山岳環境賞・B 賞（04 年、山と渓谷社）、「みどりの日」自然環境功労者表彰・環境大臣表彰（05 年、環境省）、国際ソロプチミスト秦野（クラブ賞）受賞（06 年）、「**かながわ地球環境賞**」（2015 年、神奈川県）他

＜活動の目的、具体的な内容、活動頻度、活動への参加人数など＞

●**活動の目的** 全国の里地・里山の荒廃が言われて久しい。里地・里山は、かつて人の手が入り、活用・管理されて風景を保ち、生物の多様性も維持できていた。エネルギー革命・高度成長・人びとのライフスタイルの変化とともに、価値の減少した里地・里山では農家の足音が聞こえなくなり、自然の循環が途絶えた。丹沢ドン会では、農家に代わって丹沢の麓と都市を結び、人海戦術で棚田の復元活動に取り組んでいる。自然に癒され、仲間づくりをする参加者はそれぞれの居場所を見出す。安全・安心な食べものづくりを通して生きる源である「食」を考え、小さな地域経済を起こす。人間の都合を少し控えた活動を継続しながら、生物の多様性の実現を図る。それらの活動の結果として、身近な自然である里地・里山を保全・復元して伝統的な農村風景を再生し、次の世代へ伝えることを目的としている。

●**具体的な内容**

・**シンポジウム・学習会の開催** 1992 年 11 月に第 1 回丹沢シンポジウムを開催し、「私たちの暮らしと丹沢の自然との関わり」について考えた。以降、毎年のようにシンポジウムや里地・里山の学習会を開催して里地・里山の意味や価値を考え、ブックレットにした。より多くの市民にその情報を提供し、活動の共感の輪を広げ、ドン会の活動の糧にしてきた。2006 年 12 月には、秦野市と協働で「第 3 回団塊サミット」を開催。団塊世代・シニア世代がこれからどのように地域入り、人びとと関わり、何をテーマに活動したらよいか。そのメッセージを全国に向けて発信した。

・**人の手が入らなくなった里山の管理活動** 2002 年から名古屋の共有林組合の雑木林の管理活動を開始。その後、秦野市「ふれあいの森づくり事業」で、秦野市・地権者・丹沢ドン会の 3 者の協定により羽根の管理地で雑木林の管理活動に取り組み始めた。人を寄せ付けないほどのササ藪は 5 メートルを超えていた。草払い機を使い、原野を拓くような活動が 4 年ほど続いた。現在も間伐・下草刈り、自家採取のドングリで苗木を育て、植樹を継続し、里山の元気づくりに取り組んでいる。

・**耕作放棄された棚田の復元活動** 2002 年から名古屋の荒廃農地・棚田の復元活動を始めた。高齢化した農家の棚田は、耕作放棄から 10 年を経て灌木が生い茂り雑草が身の丈以上の荒廃地になった。草払い、野焼き、畦付け、水路を造って水の確保。そして復元棚田を耕し、米づくりを復活させた。最初の年は 1 年がかりでクワやスコップなど人力で 7 枚の棚田を開墾。その後、毎年数枚ずつ開墾し、現在は 30 枚余り。里地に棚田の伝統的な農村風景が広がる。隣接の農家から自分の休耕地も復元してほしいと声が掛かり、取り組みを始めた。ドン会の棚田復元の活動は地域に広がりを見せている。

・**自然調査・自然観察会の開催** 雑木林の管理、棚田の復元により、里地・里山に生息する生き物や植生も変化してきた。東海大学や県立生命の星地球博物館の専門家の手を借りて自然環境の調査や自然観察会を継続中。棚田の開墾前と開墾後に米づくりをした段階で定点観測することで、自然の変化が見て取れる。専門家の自然調査と並行して、子どもたちが自然に親しみながら田んぼの水生生物を観察する「田んぼの生きもの観察会」を毎年実施。アカハライモリ、シマゲンゴロウ、ホトケドジョウなど、かつて全国の田んぼに当たり前のようだった水生生物が名古屋の復元棚田に帰ってきた。自然調査の結果やドン会の取り組みについては、民間ファンドなどの助成を得てブックレットにまとめ、さらなる情報発信に努めた。

・**安全・安心な食べものづくり** 復元した棚田では、無農薬・有機の米づくりを実施。毎年 500～600 キロの収穫がある。地権者に収穫した米を届ける。参加者は自ら汗を流してつくった米をカマドで炊いて収穫祭で味

わう。併せて周辺の遊休農地を借りて野菜づくりを実践。年間を通して安全・安心な食べものづくりにより緑の葉が揺れ、10月初旬にはそばの白い花が、6月には麦秋の黄金色が山麓の畑を彩る。丹沢山麓の里地が季節の移ろいとともによコスモスや菜の花の自然を映し出す。収穫された野菜は、活動日の昼食に供されるほか、持ち帰りの丹沢みやげとして参加者の食卓に添えられる。

●**広報・情報発信活動** ドン会の活動理念やイベント情報、活動報告は、会報「どんたん」「ドン会ニュース」で会員や自然塾生、関係諸団体に届け、通巻87号を数える。あわせて丹沢ドン会の定例の活動や自然塾の催しは、HPにアップされる。多彩な活動報告を見て、ドン会への参加希望が事務局へ寄せられる。また、これまで多数の新聞・雑誌・テレビ・ラジオに活動が取り上げられた。NHKテレビ、NHKラジオ、FMヨコハマ、新聞各紙、地元タウン誌、雑誌「ノジュール」「政経かながわ」「国土交通」「かながわトラストみどり財団 ミドリ」など多数に掲載され、ドン会の活動は市民権を得ることができた。

●活動頻度、活動への参加人数

丹沢ドン会の活動は、通年毎週土曜日に行われている。入れ代わり立ち代わり常時30名前後の男女が活動に参加している。昨年は、定例のドン会の活動、年13回開催している「丹沢自然塾」の参加者を加えると、年間通算2300名余りの参加者を数えた。

<活動における工夫や、独自で実践している内容>

●**ファミリー会員制度** 丹沢ドン会は、同一家族内の一人が会員になると、そのファミリーは誰でもいつでもドン会の活動に自由に参加できる。「参加者は対等平等、互いの個性を尊重し合って、得意技を生かす」ことを活動の基本にしている。目の不自由な方も、高齢の方も、赤ちゃんも、それぞれが個性。その場にいることでコミュニケーションの担い手になる。すべての参加者に、それぞれの居場所があることを願っている。肉体派の活動を担うのは40～60代であるが、参加者の年代は0歳から80歳代までと幅広く、特に子育て世代の親子の参加が近年増加していることが特徴的である。

●**「丹沢自然塾」の開催** 里地・里山の元気づくりのためには担い手が必要。担い手不足の現実に対処するために丹沢ドン会では、毎年「丹沢自然塾」の塾生を募集している。地元の農家のプロの仕事に対して、ドン会では素人が数を頼りに担い手不足を解消する。もちろん、地元農家の名人の指導を受けながら。一般紙・地元紙への情報提供と、「自然塾」に意義を見出した記者が募集記事を紙面化するという好循環、さらに塾生、塾生OBやドン会会員の口コミにより塾生は集まる。毎年、30～40名集まる新規の塾生たちは、1年間の農的・自然体験を経て、ドン会で学んだ生き方・暮らし方をそれぞれの生活の場に生かす。塾生からドン会会員になる人が増えている。塾生・ドン会会員は、県内はもとより、東京・埼玉からも電車・バスを使って参加している。丹沢山麓の里地・里山と都市を結ぶことで、担い手づくりと同時に、都市の暮らしの中に忘れがちな「農的」生活スタイルや感性を養っている。

●**「丹沢自然塾」の年間メニュー** 2014年のカリキュラムは以下の13講座。「開講オリエンテーション・苗づくり種蒔き教室」「里地・里山学習会」「棚田の田植え準備教室」「里山管理教室・秦野市植樹祭・名古木に参加」「棚田の苗取り・田植え教室」「棚田の開墾教室・竹細工教室」「田んぼの生き物観察教室」「そばの種蒔き教室」「棚田の稲刈り教室」「山ろくウォーキング+秦野歴史教室」「収穫祭・フォルクローレミニコンサート」「新そば・手打ち体験教室」「里山管理+木工教室」

<地域や他団体への普及について>

・市民グループのさきがけとして取り組んだ「丹沢シンポジウム」(1992年11月)は、丹沢自然保護協会、丹沢ブナ党、勤労者山岳連盟、山小屋の主人たちをはじめとした県下の自然保護グループや市民の協力を得て開催した。市民目線で丹沢の自然と都市の暮らしを見つめ直すきっかけの一つとなった。神奈川新聞は翌年1月1日から長期連載「丹沢の悲鳴」を開始した。

・丹沢ドン会の「丹沢山麓の里地・里山の伝統的な農村風景の保全・再生、次世代への継承活動」は、徐々に地域に浸透し、他のグループの活動の呼び水となった。秦野市との連携により、環境省の「里地里山保全再生モデル事業」全国4か所の一つ「秦野市等」として指定を受け、大都市近郊の里地・里山の保全・再生活動の「丹沢方式」として都市と農村を結ぶ仕組みづくりのきっかけとなった。

・丹沢ドン会が取り組む里地・里山の保全再生活動を広く市民に知ってもらうとともに、商店街の活性化を願って、秦野市本町四ツ角周辺の空き店舗を活用した「丹沢山麓展」を、秦野市本町地区商店会と連携して開催した(2002年3月～2003年11月)。市内外の作家の彫刻・絵画・写真・木工などの作品とともに、一般市民、近隣の4つ小学校の子どもたちの作品を展示し、商店街に人の流れをつくった。この山麓展がきっか

けとなり、第3回丹沢山麓展は、「わいわいはだの市場」（第1回）へと拡大し、地元商店街・自治会・NPOなどの市民グループの参加により、シャッター通りと化した街のにぎわいづくりに成長した。その後、商店街が中心となったイベントが毎年開催されている。

＜地域や他団体との連携等＞

・丹沢ドン会は、日本NPOセンター会員であり、「秦野市里山保全再生活動団体連絡協議会」、「秦野市市民活動団体連絡協議会」、「秦野市社会福祉協議会」、「秦野市観光協会」に加盟し、地域の他団体と情報と人の交流をし、それぞれの団体の個性を尊重し合い、ゆるやかなネットワークを結びながら、活動の面的広がりを期している。

・伊勢原市にある国の登録有形文化財である江戸末に建てられた古民家「雨岳文庫」では、2004年5月の自然塾「茶摘み新茶づくり」以来の交流が続いている。自然塾「そばの手打ち体験教室」の会場は、毎年、雨岳文庫であり、市域を越えた人的交流とNPO相互の事業連携を図っている。

・「神奈川の近代建築50選」に選定されている、本町四ツ角近くの洋風3階建て商家「五十嵐商店」（昭和初期の建築）を拠点に地域おこし活動をしている「市民がつくる秦野のまち」と丹沢ドン会との連携は、「丹沢山麓展」が機縁。里地・里山と街を結ぶ活動の一環として、五十嵐商店の環境整備を行い、ドン会の「20周年記念トーク&コンサート」を開催するなど、街のにぎわいづくりに手を携えている。

・団塊サミットの開催は、2003年11月開催の丹沢シンポジウムがきっかけとなった。講演者である北鎌倉湧水ネットワーク・野口稔代表との話から、翌年、第1回団塊サミットを鎌倉建長寺で、北鎌倉湧水ネットワークが主催、第2回を岐阜県揖斐川町で、廃校を学びの杜として復活させた「ラーニングアーバー横蔵」・樹庵の小林正美代表が主催した。第3回団塊サミット（2006年11月）は、秦野文化会館で秦野市と丹沢ドン会が協働で開催した。団塊世代が大量に現役をリタイアする2007年問題をとりえて、団塊世代を代表とする「シニアの地域への入り方」、「新しい公共と担い手」、「里地・里山などの農業と環境」のこれからについて、3つの分科会と全体会、基調講演（残間理江子）を行った。その内容は雑誌「ノジュール」に2回にわたり特集が掲載されるなど、全国に向けて発信した。

・2004年2月、丹沢ドン会の里地・里山保全再生活動が「神奈川県ボランティア活動推進基金21」補助対象事業に選定された。以後3年間にわたりドン会の活動を資金的に支え、その後の活動展開の基盤づくりに不可欠なものであった。税金を使わせてもらうという社会正義に耐えうる厳正な執行に努めた。

・ドン会の活動・企画提案に賛同してもらった民間ファンドからも力強い支援があった。ドコモ市民活動団体助成、セブン・イレブンみどりの基金、イオン環境財団、日本財団、富士ゼロックス端数倶楽部などからの貴重な助成金は、企業の社会貢献の表れであると同時に、NPO法人自然塾丹沢ドン会の活動が「豊かな地域社会づくりに資する」ための試金石でもあり、緊張感を伴いながら活用した。

・2013年4月、丹沢ドン会は、多額の寄付金を受けた。「伝統的な農村の風景を保全・再生し、次の世代に伝える」というドン会の活動理念に共感した一人の故人が、生前贈与の公正証書を残し、NPO法人日本生前契約等決済機構に託した。故人の意思を最大限に生かすため、丹沢ドン会では、その活用について検討を進めている。里地・里山の保全再生のための仕組みづくり、シニア世代の居場所づくり、次代を担う青少年の育成のための拠点づくりのための方策を検討中である。

＜出版物(企画・編集)＞

・「丹沢があぶない!」（1993年）、「丹沢の林道を考える」（1994年）、「丹沢の生きものたちの悲鳴」（1995年）、「丹沢アウトドアライフを考える」（1996年）（以上、ブックレット 夢工房発行）

・「名古屋の自然—丹沢の雑木林・棚田の復権と生きものたち—」（2003年）（財団法人イオン環境財団の「環境保全活動に対する助成金」を受ける）

・「丹沢山麓里山・田んぼ物語 伝統的景観復元と地域再生マニュアル」（2004年）（ドコモ市民活動団体助成を受ける）

・「名古屋の水生生物・哺乳類と野の花たち」（2006年）（セブン・イレブン緑の基金の助成を受ける）

丹沢ドン会 連絡先

〒257-0028 神奈川県秦野市東田原 200-49 TEL (0463) 82-7652 FAX (0463) 83-7355

HP <http://www.donkai.com> E-mail information@donkai.com

NPO 法人自然塾丹沢ドン会理事長 片桐 務（事務局 E-mail yumekoubou-t@nifty.com）